

キイチゴ

小林 幹夫(人間社会学部人間環境学科)

1. キイチゴとは

キイチゴはバラ科キイチゴ属(Rubus spp.)に属する小果樹類(Smallfruits)である。

植物学的には、キイチゴ属は種の高度のヘテロ系列と種間雑種から構成されていて、これほど命名や同定が紛糾している植物属は少ないといわれる、その数は400から500種と報告され、主として北半球の寒帯から温帯地方に多く、あるものは南半球の熱帯山岳地区に、またはるか北極圏と太平洋の島々にも発見されている。

キイチゴは、英名でBramblesというが、樹形は直立性のもの、アーチ状に曲がるもの(半直立性)、ほふく性(つる性)のものがある。大部分のものが2年生茎を生じるが、わずかな種だけが多年生茎を持つ。たいがい落葉性であるが少し常緑性のものもある。

2. 原生種と栽培種

おもな栽培種はラズベリー(Raspberry)とブラックベリー(Blackberry)の2種類に代表される。一般にラズベリーは耐寒性が強く、比較的冷涼な地域での栽培に適する。一方ブラックベリーはラズベリーに比べ耐乾性、耐暑性はあるが、耐寒性に劣るので温暖な地域での栽培に適する。

ラズベリーの原生種はヨーロッパおよび北アメリカに自生し、そのうちヨーロッパの原生種は古くから知られていた。ブラックベリーの原生種は

アジア西部、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカに自生するが、栽培に移されたのはおもに北アメリカの原生種である。

キイチゴ属はアジア東部の中国、朝鮮半島および日本にも多く自生しており、そのうち日本には8亜属70種のキイチゴ属が自生するが、いずれもラズベリーの近縁種であり、それらのいくつかは北アメリカに導入されて品種改良に用いられたが、日本における品種改良の試みはなかった。また、ブラックベリーの近縁種は日本に存在しないとされている。日本の野生キイチゴのおもなものを以下に示す。

1. フユイチゴ：千葉県以西の本州から九州に分布。小粒で赤く熟し、冬にも食べられるのでこの名がある。
2. エビガライチゴ：北海道から九州まで広く分布。赤く熟し甘味が強く生食に向く
3. バライチゴ：中部地方以西の本州から九州に分布。大粒で赤く熟す。酸味が強く加工品はイチゴとキイチゴの中間の風味を持つ。北アメリカでも栽培され、ヨーロッパでは観賞用としても栽培されている。
4. クマイチゴ：北海道北部を除く全国に分布。赤色に熟し、甘味が強い。花は観賞用として切花に利用される。
5. モミジイチゴ：本州中部以北に分布。黄色に熟し甘味強く酸味は少ない。
6. ナワシロイチゴ：日本全国に分布。果実は赤く熟し甘味がある。
7. カジイチゴ：本州・四国・九州の暖地に分布。果実は橙色に熟し、甘酸っぱい。新梢は花材に利用される。

3. 栽培と改良の歴史

キイチゴ類の果実の利用は、原生地では野生種の果実を採取することが古くから行われていたが、栽培と品種改良が行われるようになったのは他の果樹に比べると最近のことである。

ラズベリー栽培の最初の記録は1548年ごろ、イギリスのTurnerによるが、より広範な記述は1629年同じくイギリスのParkinsonの植物誌に見られる。これらは野生種を栽培したものであった。また多くの品種が18世

紀後半にイギリスから北アメリカへ導入されたが、このころになると野生種から優良な性質のものを選抜して栽培したり、野生種の交雑による品種改良がイギリスを中心として行われて、北アメリカ種よりも大きく良品質の果実生産ができる品種であった。ただし、風土に適さなかったために、その後北アメリカの自生種を改良して、改めて北アメリカ独自の品種改良が始められ19世紀後半になるとアメリカで改良されたラズベリーの品種が数多く発表されヨーロッパへも導入されて栽培が盛んになった。ラズベリーは果色によって赤ラズベリー、黒ラズベリー、紫ラズベリー、黄色ラズベリーにわけられるが、これらの果色が出揃ったのもこのころであった。

ブラックベリーの栽培は、19世紀初頭に北アメリカで始まり、そこで大部分の品種が開発された。特に北アメリカ東部を中心に有望品種が作出されており、これら栽培種はその後ヨーロッパの温帯北部で経済果樹として広く栽培され、生果や加工原料として利用されている。

4. 日本における栽培史

日本では、延喜式(925)に禁園内に果樹として栽培された記載があり、平安朝末期から鎌倉時代を経て室町時代の終わり頃まで、日常の食生活に利用され、「覆盆子」の名で見出される。しかし江戸時代以後は一般果樹から除外され栽培、品種改良されることはなかった。

明治6年(1873)に、当時の北海道開拓使がアメリカからラズベリー14品種、ブラックベリー5品種を導入し、東京官園で苗木を養成して普及に努めたが、他の果樹(リンゴ、ナシ、オウトウ、ブドウ、スモモなど)に比較して経済性が乏しく、また、加工品の需要が伸びなかったため試作にとどまり経済果樹までに拡大しなかった。しかし、近年これらの加工品が輸入され、需要もわずかながら増加している。生果も大部分は冷凍果実としてだが、ニュージーランド、オーストラリアなどからの輸入が見られる。国内でも北海道、東北の一部地域で栽培に関心もたれているが、国産の生果を気軽に求めることはまだ難しいのが現状である。

参考文献

- Chlders, Norman F. 1976 Modern Fruit Sciencu. Rutgers Univ. Press
- Hedrick, U.P. 1925 The Small Fruits of New York. N.Y. Agr. Exp. Sta.
- Janick, J., Moore J.N. 1975 Advances in Fruit Breeding. Purdue Univ. Press.
- 菊池秋雄 1948 果樹園芸学上卷 養賢堂
- 宮下揆一 1972 小果類、果樹園芸大辞典 養賢堂
- 中島二三一 1997 北国の小果樹栽培(社)北海道農業改良普及協会